

緊急消防援助隊の出動に係る総務大臣感謝状贈呈式 及び消防庁長官賞状等授与式

令和7年1月15日（水）、ホテルルポール麹町（東京都）において、令和6年9月奥能登豪雨に緊急消防援助隊として出動した都道府県大隊、土砂・風水害機動支援部隊や機関等に対する、総務大臣感謝状贈呈式及び消防庁長官賞状等授与式が開催されました。大阪市消防局の代表として橋口局長、緊急消防援助隊大阪府大隊の代表として、大阪府土砂・風水害機動支援部隊長を務めた、司令課の角山南方面隊長が出席しました。

令和6年9月、台風14号から変わった温帯低気圧及び活発な秋雨前線、線状降水帯の発生などの影響により、令和6年能登半島地震からの復興途上である石川県奥能登地方を記録的な大雨が襲いました。

令和6年9月21日（土）10時50分、石川県に大雨特別警報が発表され、河川の氾濫や大雨による浸水、土砂災害が発生したことから、同日13時08分に石川県知事から消防庁長官に対して緊急消防援助隊の応援要請があり、総務省消防庁は、ただちに緊急消防援助隊の派遣に向けた動きを取り、順次出動の求めを行い、計10府県の応援部隊が現地で活動しました。

大阪市消防局は、13時12分に消防庁長官からの指揮支援隊、航空小隊出動の求めを受け、石川県において13日間に渡り緊急消防援助隊の派遣活動を行いました。



中央左：池田消防庁長官
消防庁長官の左：橋口消防局長



中央左：村上総務大臣、中央右：池田消防庁長官
消防庁長官の右：角山南方面隊長



消防庁長官賞状を受賞する橋口消防局長



総務大臣感謝状を受領する角山南方面隊長

<派遣隊員の皆さんへ>

【大阪市消防局長 橋口博之】

令和6年能登半島地震から約半年後、再び石川県への緊急消防援助隊派遣となりました。昨年1月の派遣活動の経験から、迅速な出動、後方支援本部との緊密な連携と的確な情報収集、活動調整を行い、被災地での懸命な活動を継続していただき、本当にありがとうございました。

10月3日の活動終了までに大阪府大隊の一員として当局から延べ202名を動員し、土砂災害等の二次災害の危険があるなか、孤立地域の救助活動や安否不明者の捜索等、様々な活動に尽力した派遣隊員の姿は、度重なる災害により、大きな悲しみと不安を抱えた被災者の方々にとって、まさしく希望の光そのものだったと思います。自然災害が甚大化し、南海トラフ巨大地震等の発生も懸念されておりますが、これからも当局は、市民の生命と財産を守るという崇高な使命を達成できるよう、消防力を充実させていきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

【警防部司令課南方面隊長 角山栄一】

石川県能登地方の大雨災害に対する大阪府土砂・風水害機動支援部隊等として、9月21日から10月3日までの13日間、大阪府内消防本部の14隊延べ271名が派遣されました。連日、30度を超える暑さの中、被災者に寄り添い、少しでも力になれるように活動することを肝に銘じ、孤立した家屋からの救助活動や、気が遠くなる程の大量の土砂・流木を丁寧に取り除きながら、救助・捜索活動を実施しました。1月の能登半島地震から復興途上のなか、地震と豪雨被害の二重被害となり、被災者の心情を考えますと非常に心が痛みますが、大阪府を代表し総務大臣感謝状を賜りました。これも派遣隊員の皆様一人一人の、実直かつ被災者に寄り添った活動の結果であると思います。本当にありがとうございました。

最後に被災地の一日も早い復旧復興と、被災者の皆様が一日でも早く元の生活が送れますことを祈念いたします。

いっしょに、いこな！ 2025年 大阪・関西万博

開催まであと39日です!!

※（令和7年3月5日現在）



みなさん、こんにちは！
大阪・関西万博の開催まで、ついに1か月余りとなりました。
前号では大阪市消防局と株式会社モリタホールディングス（以下、「モリタHD」という。）との取組について触れましたが、今回もその続きの記事となりますので、前号をご覧ください。いない方は、ぜひこちらもご覧ください。
大阪・関西万博の安全・安心を確保するという共通の目的のため、当局とモリタHDは様々な共同研究開発を行っており、その中には消防車両についても含まれています。
万博会場の安全のため、モリタHDが最新鋭の消防車両を協賛することは先月号でお伝えしましたが、万博開催期間中に会場内で火災等が発生した場合には、当局の車両に加えてその協賛車両も活用し、災害対応を行います。
今回はその協賛車両についてご紹介したいと思います。

- 1 EV消防ポンプ車**
消防車両についても脱炭素に向けて、今後は電動式が主流になることが予想されるため、万博のテーマである「未来社会のデザイン」に則ったEV消防車を取り入れるとともに、大屋根リングなどの高所で発生した災害にも対応できる高所活動車を活用します。
- 2 高所活動車（MVF21）**
最大21mまで伸びるブームが特徴で、大屋根リングなどの高所で発生した災害にも対応可能な車両です。
また、バスケットは車いすに乗った方でも救助可能なスペースを有しており、定員4名まで搭乗することが可能です。

協賛車両について

おわりに

今回はモリタHDの協賛車両の一部について紹介しました。
来場者の方々の安全を守ることは大前提に、未来社会を見据えた取組も万博という機会を通して、モリタHDと継続して行っていく予定です。
今後は共同研究開発で検証を進めている内容、「災害現場活動の最適化に向けたシステム」についての紹介を予定していますので、乞うご期待ください。



高所活動車（MVF21）

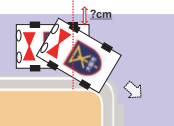
EV 消防ポンプ車

4 外輪差・内輪差

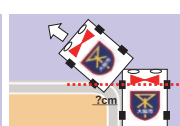
POINT 前輪、後輪の軌道を把握しよう

外輪差(内輪差)

- ①後(前)輪の延長線上にラインをひく。
- ②左にすぎりした状態で後(前)退したとき、前(後)輪がラインのどこを通るか予測。
- ③後(前)輪の位置と前(後)輪が通過した位置を計測。



外輪差



内輪差

※パーを設置し、障害物との距離を視覚的に理解する。



5 クランク、S字、コの字コース

POINT 走行ラインをイメージし、ハンドル操作を理解しよう

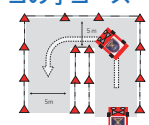
クランクコース



S字コース



コの字コース



POINT タイヤの位置や車体の向きを把握しよう

6 縦列駐車



7 方向変換

左右の後輪の位置と、左右前後方の安全確認、進行方向と反対方向のオーバーハングについて理解する。



反対方向の進路についても同様に実施。

ビデオ診断

今回は、7つの実技研修に加えて、大阪ガスオートサービス株式会社の協力のもと、運転者の姿勢、目線、足元の動き等を録画できる機能のあるドライブレコーダーを使用し、受講生の運転についてビデオ診断を実施しました。

■ビデオ診断実施後に、講師の方へお話を伺いました。



大阪ガスオートサービス株式会社 安心運転訓練センター 津崎 恵吾氏

今回、受講生の皆様の運転を拝見しましたが、全体的に運転の質が高いと感じました。消防職員の皆様に気を付けていただきたい点としては、運転の基本的な話になりますが、停止線の前ではしっかり停止する、対向車線に停車している車列の隙間から飛び出してくる可能性のある歩行者などがあることを予測しながら運転する、また、トラックを運転していると、視界の中で路面が見えやすいという特徴があるので、前の車との車間距離が近くなりがちになることなどに注意しながら、安全な運転に努めていただきたいと思います。

受講者アンケート



「死角や内外輪差を知ることで、緊急出場走行及び通常走行において、運転手のみでは把握しきれない箇所を改めて再確認することができた。この経験をコメントリードライブにつなげることで、今後は、より一層、乗組員全員で事故防止に努めることができると感じた。」



「今回の研修で、自分が感覚的に運転している部分が多々あったことが分かった。内輪差や外輪差など、具体的な数値と実際の距離感の把握により、どのくらいの距離を確保すればいいのか考える余裕ができた。」



「公用車事故の経験がないため、自信を持って機関業務に従事していたが、ビデオ診断及び運転実技を通して、車両感覚や道路通行時の注意すべき点が甘いと実感できた。研修の場でしか注意されないことも多く、事故を起こさない運転に活かすことができると感じた。」

無事故チャレンジ達成日数(令和7年1月末)

北	都島	福島	此花	中央	西	港	大正	天王寺	浪速
33	77	237	79	342	647	382	43	728	118
西淀川	淀川	東淀川	東成	生野	旭	城東	鶴見	阿倍野	住之江
215	34	457	354	36	50	271	150	28	685
住吉	東住吉	平野	西成	水上					
103	33	21	7	378					

企画課 服務指導からのコメント

今年度の機関員技能研修は、狭路道路や敷地内での接触、また避難車両のサイドミラーへの接触など、車両諸元の未把握による事故が静止物件事故の約半数を占めていることを受け、車両感覚に特化した内容に変更しました。この研修では、前方や側方の車両感覚の向上に加え、外輪差や内輪差の把握に重点を置いています。特に、経験の浅い機関員に対する車両感覚の強化が重要な課題であると認識していますので、各所属におかれましても、この研修内容を基に、安全運行の技術向上を図っていただきますようお願いいたします。

No more ! 事故

～撲滅への道～

119番通報を受けた際、安全かつ迅速に出場することで、いち早く災害現場へ駆けつける消防車両。消防車両は、安全に現場へ到着してこそ、最大限の活動が実施できます。今月は、令和6年12月に実施された機関員技能研修(実技編)について紹介します。この研修は、実技内容を7つに分け、各項目へ目的を設けることで研修の意図を明確にし、機関員の技能を習得してもらうための研修です。

1 運転姿勢

POINT 運行前に、まずは基本！



正しい運転姿勢の効果

- ・安全性の向上
急な操作が必要な場合でも迅速かつ正確な対応が可能
- ・視界の確保
他の車両や歩行者、自転車などを見逃すリスクが減少
- ・車両のコントロール力向上
運転操作ミスが減少

2 死角

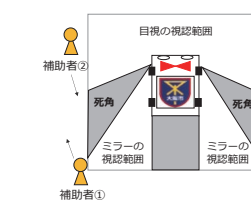
POINT 車両一周確認や乗組員全員の視認で死角をカバーしよう

1 範囲と位置と危険エリア

1. 死角の範囲: 運転席からは見えない車の周囲に存在する死角
2. 危険エリア: バイクや自転車が死角に入りやすいエリア。



2 ミラーの視認範囲



サイドミラーにロープを2本結ぶ。ロープを持った補助者①が後輪付近から離れるように移動し、機関員はサイドミラーで補助者①が見えなくなったところで合図をする。次に機関員は前方を向き、後方へ移動した補助者②が見えなくなったところで合図をする。この時の補助者①と補助者②との間が死角となる。反対側も同様に実施する。

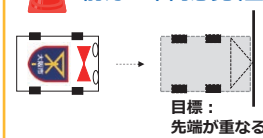
3 車両感覚

POINT これくらいだろうという曖昧な感覚でなく、正確な車両感覚を掴もう

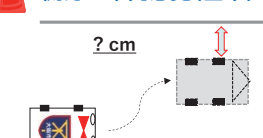
- 前方と側方: ①サイドミラーをたたみ、ミラーでの目視ができない状態でラインまで車を近付け、停車した位置からラインまでの距離を測定。
②前方: ライン上に停止時のドアパネル上に目印を作成し、体験運転を繰り返す。
側方: ダッシュボード上に目印を作成し、体験運転を繰り返す。

後方: ①左右のミラーを見ながら、また、②右後方を目視しながら、それぞれ後方ラインまでの距離を測定後、体験運転を繰り返す。

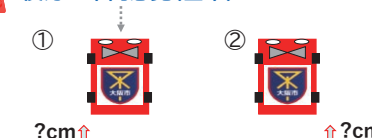
1 前方の車両感覚(基本)



2 側方の車両感覚(基本)



3 後方の車両感覚(基本)



4 車両感覚(応用)

- ①サイドミラーをたたみ、前方及び左側のラインに車両を合わせる。
 - ②左右のミラーを見ながら、右タイヤがラインに沿うように右後方に後退し、後方の三角コーンのラインに停車。
- ※ 左右逆側も同様に実施。



大型表示装置



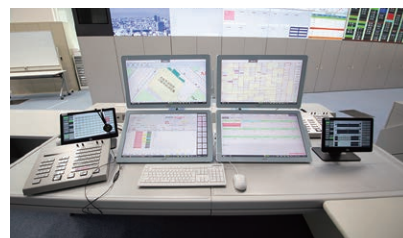
55インチ液晶画面を縦4面×横12面に接続し設置したもので、高所監視カメラ映像やヘリコプターテレビ電送システム映像をはじめ、各種災害支援情報を表示することで情報共有を図るとともに、消防活動の支援を行うことができます。車両表示板には、約400台の消防・救急車両の動態情報10項目を色で識別し、消防隊等の活動状況を常時把握することができます。

表示型受令表示装置



消防指令センターからの出場指令情報により、表示型受令装置（液晶ディスプレイ）に各隊別の出場指令を表示します。

統合指令台



事案情報・支援情報・地図などを4面画面に表示し、119番通報の受信から消防隊の最適な編成機能、出場指令機能、無線管制機能、関係機関とのホットラインを有し、119番通報受付から消防隊・救急隊の帰署まで、総合的な指令管制機能を有しています。

可搬型簡易指令台



大規模災害が発生し、119着信が輻輳した際、指令管制員以外の職員でも容易に事案を作成し指令できるよう、簡易指令台機能を備えています。

受令端末

出場指令の受信、被災建物情報、災害現場映像等の情報共有ができます。また、各種支援情報の登録、照会が可能となり、登録した情報はリアルタイムに指令台や作戦室への情報共有が可能となります。



事案管理

事案参照機能による最新情報の取得（指令情報、事案情報など）

車載端末連携

車載端末と紐づいた高度な活動支援（動態設定、支援情報検索）

通行止・水利管理など

現地からの情報登録・更新による支援情報システムへのリアルタイム連携

GIS活用

現場活動の地図機能の活用
GPS機能で連動した情報登録・参照

映像伝送

リアルタイム映像送受信機能による災害対応力の向上

コミュニケーション

グループチャット機能による情報共有の強化（声・チャット、画像・動画）

新消防情報システム（ANSIN）

大阪市消防局では、迅速・効率的な消防活動を支援するため、昭和53年から消防業務の情報化に着手し、火災救急指令システムを稼働しました。平成元年に地図情報システム、発信地表示システムを加えた第2世代の消防指令情報システムに更新。その後、高所監視カメラ（平成3年）、画像伝送システム（平成7年）、初動消防活動支援システム（平成8年）、消防車両動態管理・情報電送システム（平成10年）

ケイボウタイムズ

～警防課の「いま」を伝える～

第11回 新消防情報システム（ANSIN）

（警防課〈指令共同〉）

災害現場での活動を支える「警防部 警防課」。「ケイボウタイムズ」では、毎号、警防課の各担当による「この時期だから伝えたい」旬なネタを掲載するほか、警防課が取り組む施策や事業についてお伝えします。



新消防指令センターの全景



大規模災害にも的確に対処

大規模災害にも的確に対処するため、119番輻輳時には通常1名で使用する指令台を2名で利用できる構造とし、迅速な初動体制を実現できる機能を有しています。

などを追加し、これらを通信ネットワークにより有機的に結合し、消防情報システム「ANSIN」として運用を開始しました。平成20年に、消防局庁舎の建替移転にあわせて、汎用システムからオープンシステムとして全更新を行いました。

そしてこのたび、技術進歩の著しい最新のICT技術を十分に活用し、複雑、多様化する消防活動の支援システムとして、より効果的かつ安定した消防情報システムに更新するとともに、住民サービスの向上並びに効果的及び効率的な消防指令業務の運用を目指し、令和7年4月1日から松原市消防本部との共同運用を行う「大阪市・松原市消防指令センター」

の運用を開始します。

大阪市・松原市消防指令センター

大阪市・松原市消防指令センターには、119番通報や消防・救急活動に関する情報が集約され、広域イーサネットで結ばれた消防署・出張所・分署に指令情報が伝えられます。

災害状況や各種の支援情報は、視認性に優れた大型表示装置でリアルタイムに把握することができ、関係機関や災害現場に急行する消防・救急車両に必要な情報を発信し、迅速・的確な消防活動を支援します。



一般廃棄物処理施設内における火災

■はじめに

本火災は、令和6年10月に発生した一般廃棄物処理施設の火災である。

本施設は広大な敷地、複雑な内部構造であり、鎮火までに時間を要したものの、施設の設備を有効活用しながら消火活動を実施している。

■火災概要

構造様式

RC造陸屋根地下3階地上7階建一般廃棄物処理施設
建9,275㎡／延30,197㎡

焼損程度

・ごみ焼却施設ごみピット内において、ごみ2,000㎡

焼損

・5階見学ホール及びクレイン操作室の窓破損
・屋上採光用窓破損

■災害状況

覚知時刻	22時11分
第1出場	22時12分
第2出場	22時43分
鎮圧時刻	翌6時54分
鎮火時刻	翌12時30分

■活動内容

「H管内高層建物火災、大阪広域環境施設組合H工場出火」の火災指令で消防隊が出場した。H消防隊が走行中に臭気を確認、H救助隊到着時には屋上より黒煙を認めている。先着消防隊が到着し、ホース延長作業と並行して施設関係者から

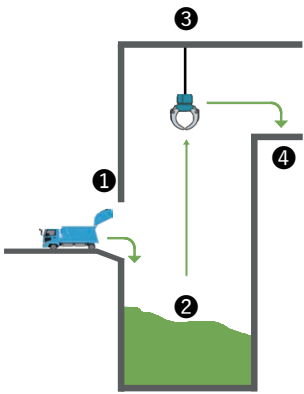
情報収集を実施し、「搬入車両が、ごみピットにごみを投入後すぐに大きな爆発が2回発生し、ごみピット内に貯留しているごみが広範囲にわたって燃焼している」との情報入手。2階ごみ投入扉に至り、ごみピット内にて50㎡の燃焼を確認しすぐさま燃焼実体に向け放水を開始した。指揮本部は情報担当より、ごみピット内の燃焼状況及び筒先数が不足しているという情報入手し第2出場を要請。初期のごみピット内はごみが激しく燃焼、濃煙熱気が立ち込め進入は困難なため、消火活動の方針はごみピット内への進入が可能となるまでは、煙の流入等がない2階ごみ投入扉からの大量放水とした。

てタレット放水に切り替えるなど、効率的な消火活動を実施した。また、消防隊の放水と並行して、施設職員の操作により放水銃からの放水も継続して実施した。

火災の中期以降ごみピット内の状況が変化し屋内進入が可能となったため、消防隊及び救助隊が5階ごみピット内の安全な場所に転進、連結送水管の放水口よりホース延長。面体着装後、熱画像直視装置を使用し、熱源を確認しながらの俯瞰注水を実施した。俯瞰注水を実施することにより、効率よく燃焼実態に注水することが可能となり鎮圧及び鎮火に至った。

■大阪広域環境施設組合廃棄物処理場について

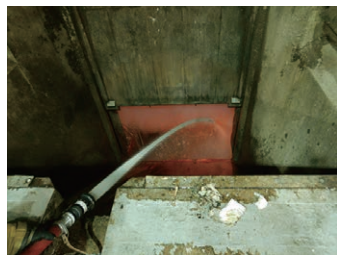
大阪広域環境施設組合は、大阪市、八尾市、松原市、守口市から排出される一般廃棄物の焼却処理、埋立処分を共同で行う一部事務組



施設断面図

合であり、2014年に設立された。廃棄物処理施設は大阪市内に6カ所存在し、1カ所あたり1日最大約900tのごみを焼却している。24時間365日稼働し、施設職員も常駐する施設である。

塵芥収集車によって収集されたごみはごみ投入扉（施設断面図中（以下、「図中」とする）①）より投入され、ごみピット内（図中②）に集積される。集積されたごみはごみクレーン操作室での遠隔操作によりごみクレーン（図中③）を操作し、投入ホッパ（図中④）まで運ばれ、焼却炉へと進み焼却に至る。施設内には、焼却炉の稼働状況をはじめ、貯留しているごみの量やごみの温度検知を行う設備があり、ごみが一定温度以上になれば施設に設置された放水銃が自動（手動も可）作動し消火を行う。



ごみピット内への注水

■活動のポイント

本施設は広大な敷地面積があり、施設内部の構造も複雑であった。そうした施設での火災は、早期に災害点の確認や燃焼状況等の情報を収集のうえ、収集した情報をもとに活動方針を決定し、出場隊で共通認識を持つて活動することが重要である。

本火災は、ごみを集積するごみピット内で発生している。ごみピット内は十数メートルの深さがあり4、5階層分の高さを有している。ピット内で火災が発生した際の活動ポイントを3点紹介する。

① 消火活動場所

ごみ投入扉からの放水は注水死角部分があり、ごみピット内



ごみ投入扉付近での活動状況

の全てのごみに対して有効な放水とはならないため、上階からの俯瞰注水ができる位置に筒先部署し俯瞰注水することが重要である。

② 施設に設置されている設備の活用

本施設には連結送水管、放水銃等が設置されている。それらを活用することで効率的な消火活動を実施することができると。今回の火災では、放水銃やピット内の排煙設備を操作している施設職員と連携した活動が実施されていた。

③ 資器材の有効活用及び連携した活動

ピット内が濃煙の場合は熱画像直視装置等を使用し、熱源の確認作業と並行しての消火活動が必要となるため、消防隊と救助隊が連携した活動を行うことが重要である。また、タレットやクロスファイヤー放水銃など、長時間放水に適した放水器具の使用も考慮する必要がある。

■まとめ

本施設は広大な敷地面積かつ複雑な内部構造であり、また周辺の水利状況も充足しているとは言えない状況であった。このような施設での火災は消火活動が難航することが予想される。また、同様の施設はH管内だけではなく市内に複数存在しているため、該当署及び近隣署は警防調査や図上訓練等を実施し、施設の特徴や活動のポイントを理解しておくことで火災の被害を最小限に抑えることができる。

過去の災害を活動隊員の「声」で振り返る

Weave the past, Weave the future

—過去・未来を紡ぐ—

第4回 淀川区十三本町1丁目火災

平成26年3月早朝、木造2階建ての飲食店が密集するエリアで起きた炎上火災。計62台（うち航空機1機）が出動して消火にあたり、建物の崩落や爆発も相次ぐ中、負傷者ゼロで活動を終えることができた。



木造の飲食店が密集した火災現場

寒さ残る3月の早朝、6時9分に覚知し、熾烈な火勢や崩落建物による活動障害など困難を極めた、通称「しよんべん横丁火災」。鎮圧までに約3時間を要し、総出場台数は61台及び1機を数え、覚知から11時間30分の火災防ぎょ活動となりました。延焼の拡大とともに建物の倒壊や崩落、3度にわたる爆発が発生するなどの危険要因が同時多発的に発生したにも関わらず、一人の負傷者も発生しませんでした。

その現場で、北方面隊の隊員として出場した、現中央消防署 藤本英司 警防担当司令に当時のお話を伺いました。

―災害点が大幅に修正された状況について

災害点が大幅に修正されたのは、直近隊の部署報告の6分後でした。距離にして東方向へ約50mです。それに加えて、当該地域は特定密集地域だったために、通常の第1出場による部隊編成ではなく、特別第1出場へと変更になりました。事前の出場計画や包囲体制等も崩れ、非常に混乱する中での活動開始となりました。

―初期情報についてお聞かせください

北方面隊として現場に到着すると、飲食店舗から黒煙が噴出し、南北の隣接建物2階の軒先から

―延焼阻止線の設定が難しかったそうですね

予想以上に延焼のスピードが早く、延焼阻止線の設定を各隊に伝えることが難しい状況でした。指揮本部で協議し、3度にわたり延焼阻止線を設定しましたが、無線だけでは各隊にうまく伝わらず、口頭で伝えるために奔走しました。特に、消火隊に延焼阻止線の設定を指示しても、目の前の消火活動に懸命で転進に時間がかかる隊もありました。そのため、火勢を迎え撃とうにも、不十分な筒先配備になることもあり、方面隊員として現場指示の難しさ、力量不足を痛感しました。

その後、火点に近い飲食店舗が燃焼最盛期となり、部分的な建物崩落に続いて建物全体が崩れ落ちました。この崩落が、本火災の重要な消防隊活動動線を分断する形となり、南北への行き来が出来ない状況に陥りました。また、消火活動中に延長ホースが崩落建物の下敷きになり、使用できなくなった隊もありました。

―負傷者ゼロにつながった要因は何だと思われますか？

方面隊員として奔走し、各小隊に倒壊の危険性、延焼の速さ、内部進入時の退路確保などについて、声が枯れるほど伝えたと記憶しています。

■災害概況

発生場所	淀川区十三本町1丁目2番 十三橋商店街
覚知日時	平成26年3月7日（金）6時9分
鎮圧日時	平成26年3月7日（金）9時19分
鎮火日時	平成26年3月7日（金）17時39分
出動隊	計62台（うち航空機1機）
負傷者	なし
焼損程度	焼損棟数43店舗 1駅舎（阪急十三駅）の計1,658㎡焼損 124㎡表面焼損
現場は、阪急十三駅西口から神戸線沿いに北に延びる、通称「しよんべん横丁」とその西側の通り「なかすじ」に挟まれた木造2階建ての飲食店が密集した地域である。この地域は、西側に街区一つを挟んで国道176号線の高架道路が南北に走り、東側に十三駅、南側にアーケード商店街がある地域性で、警防活動上、消防車両のよりつきが難しい状況であった。	

―活動中に特に大変だったことは？

出火時刻が早朝で閉まっている店舗もあり、消火隊が屋内進入するには店舗シャッター等を破壊する必要がありました。また、延焼経路となる

活動が困難を極め、常に危険と隣り合わせだったこのような大火災で負傷者がなかったことは、本当に不幸中の幸いでした。

そんな中、負傷者のない活動につながった要因としては、大消本部や指揮本部、指揮班や方面隊、救助指揮支援隊（現：本部特別高度救助隊）などが、積極的に災害状況や倒壊危険情報などを現場に伝え、全隊員が建物の倒壊などの危険情報を共有しながら活動したことが挙げられると思います。

藤本司令からのメッセージ

皆さんが勤務する消防署の管内または隣接する管内に、活動困難が予測される地域、対象物はありますか？ 警防視察、警防調査を実践していますか？ 小隊単位、中隊単位での災害活動をイメージできるでしょうか？ 災害現場対応の最前線である消防署でも世代交代が進んでおり、安全迅速に活動することが難しいと感じ



中央消防署 警防担当司令
藤本 英司

ることがあると思います。警防訓練等の実践は当然ですが、特に若手職員に災害活動のイメージを広げてもらうことも必要だと考えます。この「しよんべん横丁火災」を対岸の火事にとすることなく、災害活動能力及び、安全管理意識向上につなげていただけると幸いです。